

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・社会学専修3年 (氏名) 山淵あいら

今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学での発表とディスカッション、諸機関訪問や観光地見学と、1週間という短い期間ではあったが非常に充実した時間を過ごすことができた。以下、ハイデルベルク市内見学とハイ大施設訪問について報告する。

ハイデルベルクは散策しているだけで、視覚的にも聴覚的にも気分を高揚させる刺激にあふれていた。レンガ造りの建築物、荘厳なプロテスタント教会、1年中クリスマスモードの雑貨屋さん。歩き慣れない石畳の道も、トラムが走る風景も印象的だった。市内のいたるところに大学施設が点在しているためか、アカデミックな「学生の町」という雰囲気がある。私たちはネッカー川にかかるカールテオドル橋を渡り、哲学の道を歩いた。ハイデルベルクの哲学の道は京都のそれとは違い、斜面が厳しく階段も多い。息が切れ、若干汗ばむほどで、ちょっとしたハイキングをしている気分だった。見晴らしの良いところに出ると、目前に広がるその景色は格別で、ゲートをはじめとする哲学者やヴェーバーやハーバーマスといった名だたる社会学者らもこの風景を眺めながら、上がった息を沈めつつ物を思ったのだろうか、と想像すると胸が高鳴った。京大からの派遣メンバーの一員として、先生や友人たちとこの景色を見ることができたことが嬉しく、光栄に思った。

ハイデルベルク城は標高の高いところに建っており、赤い壁がライトアップされている夜に見上げると、怖く感じさえるほど神秘的だった。翌日、私たちはケーブルカーでお城まで登った。ルネサンス期の壮大な建築物で、威厳ある格調高い雰囲気に包まれている城には、かつて住んでいた選帝侯や建築芸術をめぐるたくさんの逸話や神話があり、それらを引率の先生から聞きながら見学した。伝統あるハイデルベルク城は多くの戦争も経験しており、破壊されて城壁が崩れ落ちているところも少なくない。その爪痕から戦争の歴史を感じることができた。

市内見学において最も印象的だったもののひとつは、シンティ・ロマ博物館である。ナチス占領下のヨーロッパで、段階的な隔離・権利剥奪から組織的な大量虐殺といった、人道に反する差別の犠牲となったシンティ・ロマの歴史や当時の様子を示す写真や資料が展示してある。それまでヨーロッパの風景や食事に少々浮かれていた私たちは、この展示を通してドイツや周辺国の経験と記憶を改めて学び、それぞれが今回の研究のテーマでもある「戦争と平和」について再び考えた。ホロコーストについて、日本で学ぶのとドイツで学ぶのでは大きく違う。ハイデルベルク市内にも知識のある者たちが収容され、書籍が燃やされた広場があった。そのような場所を実際に訪れながら、当時について考える経験は得難いものであると思う。

ハイ大施設としては、大学図書館や学生牢の見学、京大ハイデルベルクオフィスの訪問をした。図書館はまるで遺跡や美術館かのような建築で、ここで学ぶハイ大の学生をうらやましく思った。学生牢も印象的だった。治外法権をもつ大学は、騒ぎを起こした学生を大学において裁判にかけ学生牢に入れていたというが、学生たちは投獄されることを誇りに思っており、ここに入ることはひとつの勲章だったというのは興味深い。

京大オフィスは学生牢の真下にあった。京大からの留学生への支援のほかにも、ハイ大の学生に京大を知ってもらうための活動も積極的に行っているようだ。オフィスの知名度も上がってきているというお話を伺った。ハイデルベルク大学で学ぶ機会を持つことができた際には、非常に心強いなという印象を受けた。

以上がハイデルベルク市内見学の概要と感想であるが、ここには書ききれないほどの経験ができた研修だった。研修を通じて得ることのできた人との出会いも、私にとっては大きな収穫だ。トランスカルチャーを学ぶ学生や日本語を専攻する学生、京大への留学を考えている学生やハイデルベルク大学で学ぶ京大生——。彼らから聞く話はどれも興味深く、研究に対するエネルギーを感じ、私のモチベーションも刺激されたように思う。1週間行動を共にした派遣メンバーにもたくさんのことを教わり、いろいろな場面で助けてもらった。今後も関係が続けばいいなと思える友人を得たことも大きな収穫だ。

最後に、この派遣プログラムに関わってくださった全ての方々に感謝したい。ありがとうございました。